



ピロリ菌が胃炎 仕組み解明

治療法開発に期待 阪大グループ

ピロリ菌が胃炎を起こす仕組み イメージ



胃に感染する細菌「ピロリ菌」が胃炎を起こす仕組みを、大阪大微生物病研究所の山崎晶教授らのグループがつきとめ、米実験医学誌に発表した。ピロリ菌は胃炎や胃潰瘍などを起こし、一部は胃がんにつながる。とされる。今回の研究が新たな治療法開発につながる可能性がある。

世界の人口のおよそ半分が感染しているとされるピロリ菌は、写真、研究グループ提供は、病原体を攻撃する免疫細胞の働

きを高める。ふつう、この働きが高まると、免疫細胞は病原体を攻撃する。ピロリ菌はこの攻撃をかわし、胃炎が起きてしまう。これまで詳しい仕組みは謎だった。

グループは、ピロリ菌が免疫細胞を刺激して働きを高める物質を探し、2種類の物質を見つけた。ピロリ菌が、感染した相手の細胞のコレステロールを取り込んで、作り出した化合物だった。マウスの実験で、この化合物ができないようにすると、ピロリ菌を感染させても胃炎は軽くなり、この化合物が胃炎につながることもわかった。

ピロリ菌感染には抗生剤による除菌が勧められるが、抗生剤に強い耐性菌の出現や、抗生剤の副作用が問題になっていた。

今回わかった仕組みを応用すると、抗生剤を使わずに、ピロリ菌による胃潰瘍を防ぐ新たな治療法の開発につながる。グループはみている。

山崎教授は「ピロリ菌がコレステロールを改変する仕組みを抑えると、新しい胃炎の薬ができる可能性がある」と話している。(瀬川茂子)